すっかんぽ

☆ 研究室だより No.15　　1993年　8月号

イボイモリに命をかける男

〈山原日記 '93 7.8 その2〉

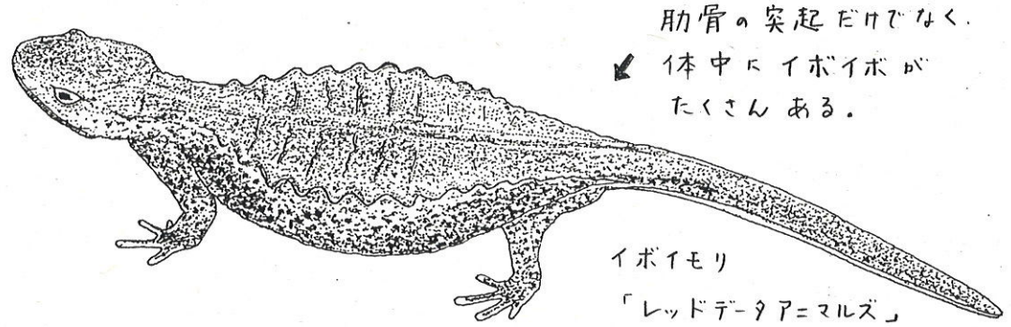
山原(ヤンバル)を旅していて一つだけ困ったことがあった。食堂がほとんどなく、あっても休業中なのだ。沖縄は近年急激に観光地化されているが、山原にまでは手がのびていないようだった。食堂や民宿は観光客向けのものでなく、道路やダムの建設工事に関わる人たちが目合てなのだそうだ。

2時をすぎても見つからず、しかたなく小さな雑貨屋でパンと牛乳を買って昼食にすることにした。しかし、けっこういろいろなものが置いてあって、カップめんまで沖縄バージョンなのには驚いた。

ところで今回の旅のメインイベントは、山原を少し離れるが瀬底島(せそこじま)という小さな島にすむイボイモリを見ることにあった

安くて軽いのでおみやげにぴったり…と思って二個買ったが、がさばりすぎて後悔。

イボイモリは、体長20cm近くにも達する大型のイモリで、沖縄本島や、奄美大島などにしか生息しておらず、沖縄県の天然記念物に指定されている。背中に木の葉を広げたように肋骨の突起があるのが特徴である。



イボイモリ
「レッドデータアニマルズ」より写真をスケッチ

イボイモリという名前を聞いただけでイヤな顔をするのが普通だと思うが、このイモリを一年中ほとんど毎日のように調査している高校の先生がいるというのだ。杉尾先生の琉球大時代の先輩で、本部(もとぶ)高校教諭の田中聡(さとし)先生がその人だ。田中先生は、子供のころから、ハ虫類や両生類に異常なまでの興味を示し、ほとんど一しょに生活していたそうだが、その研究論文等は、当時から一目おかれる存在だったらしい。大学では、キノボリトカゲを研究し、今度は、イボイモリを研究するために瀬底島に最も近い本部(もとぶ)高校にやってきたのである。

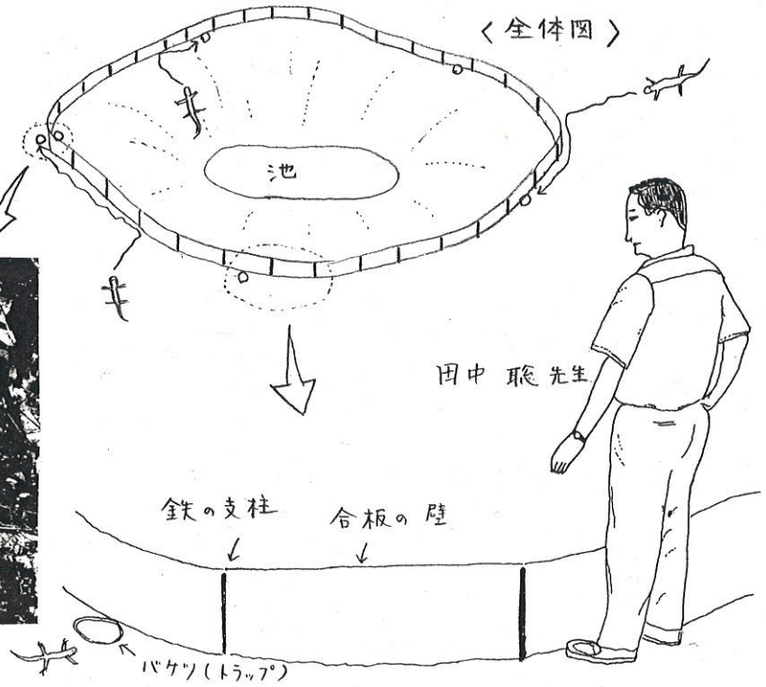
まさに両生、ハ虫類に一生を捧げているといっても過言ではない田中先生は、約束した5時に瀬底島に現われたのである。一見、ひとなつこそうであるが、何となくハ虫類的なすばしこさを感じさせる雰囲気があった。そして話を聞いていくうちに、想像を絶するとんでもない人物であることが明らかになってきたのである。

瀬底島は、人口900人程度の小さな島で、つい最近まで渡し舟で沖縄本島と行き来をしていたが、やっと瀬底大橋で結ばれたのだそうだ。高校生は橋を渡って、田中先生の勤務する本部(もとぶ)高校まで通学するのである。

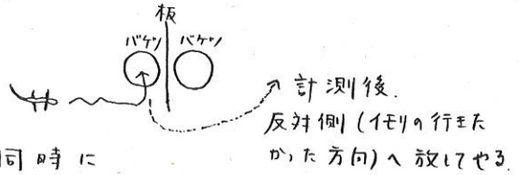
イボイモリはこの小さな島に生息していて、島に何ケ所かある池に11月から5月にかけて産卵に現われる。しかし、池は、昔から拝所といって日でりの時、飲み水を確保する神聖な場所とされているのである。いくら調査とはいえ、勝手に入り込んで汚(けが)すことは許されない。ここからが田中先生のすごいところなのだが、地元の長老を説得し、御祓(おはら)いをしてもらい、池全体を合板でぐるりととりかこむ工事をしてしまったのだ。

この工事は、3ケ所の池で行われ、工事費用の30数万円は、自腹を切ったのである。この合板の囲いは、人間が入るのを防ぐためではなく、産卵にくるイボイモリの出入りを完全にチェックするためのものなのである。

・囲いの直径は、10m くらいはある。



夜、池をめざして産卵にやってきたイボイモリは、合板にぶつかり、行手をさえぎられると、合板にそって歩いていく。すると、所々にうめこんであるバケツのトラップに落ちてしまうのだ。逆に、池から森にもどろうとする個体も、合板につきあたり、歩いているうちにバケツに入ってしまう。ほとんど100%このトラップに入るらしい。朝、学校に行く前に、田中先生は、瀬底島にやってきて、場所ごとにバケツからイボイモリを回収し、学校へもっていく。そして、授業のない時間や放課後を利用し、体の大きさを計測し、翌朝、入ったバケツの反対側に放してやるのだ。



産卵のピークになると、バケツに入るイモリの数は、数100匹をこえ、計測は、徹夜をしても朝までかかり、放すと同時に次の日の分を回収し、計測することになり、これが数日続くのだそうだ。さらに、その一ぴき一ぴきに標識(目印)をつけ、識別しているというから驚きである。こんな生活が産卵期間中続くのだが、それで終りではない。今度は卵からふ化した幼生の成長を調べるのだ。つまり一年中、3つある調査池に毎日かようことになるのである。小さな島なので、他からイボイモリが入ってくる心配がなく、5年間調査を続ければ、瀬底島にすむイボイモリの生活史がほぼ完全に明らかになるのだそうだ。まさに、田中先生はイボイモリに人生をかけているといってもいいだろう。「日本では、彼のレベルまでついてこれる人はいない!」と言い切る杉尾先生の言葉に私はただうなづくしかなかった。

この小さな島にイボイモリに命をかけるとんでもない男がいるという事実を知っただけでも、沖縄に来たかいがあったと思いながら、宿へ帰った。1993年7月8日の長い一日が終わろうとしていた。